

## スポーツ実況における I モード表現としての <ça + 動作動詞>

栗原 唯（大阪大学）

### 1. はじめに

#### 1.1 本発表の背景

本発表はスポーツ実況映像<sup>1</sup>における発話を、その認知対象（何が起こったか、何を見たか）、認知状況（新たな認知を引き起こすきっかけは何か）、語用論的発話状況（リアルタイム描写の要請）と関連させたマルチモーダルコーパスの構築とその分析を目指す研究の一環として位置付けられる<sup>2</sup>。

### 1.2 コーパス

#### 1.2.1 対象競技・レース

- ◆ 取り上げる試合・レースは世界規模のもの<sup>3</sup>。
- ◆ 競技形態および実況中継形態から 7 つのグループに分類し、それぞれのグループから具体的な試合・レースを取り上げた<sup>4</sup>。

	競技者	被写体	予測性	競技タイプ	選定競技 (全て France TV 放映)
グループ 1	複数	変動 (複数競技者)	低	複数選手が広範囲に広がる長距離走タイプの競技	TDF - ツールドフランス 2024 第 4 ステージ
グループ 2	2~複数	固定 (ボール)	低	球技	V - バレーボールネーションズリーグ 2024 男子第三週日本対フランス
グループ 3	複数	固定 (先頭)	低	複数選手が 1 画面に収まる中短距離競争タイプの競技	N - パリオリンピック水泳平泳男子 100m 準決勝
グループ 4	2 人	固定 (競技者)	低	格闘技	J - パリオリンピック柔道女子 63 キロ級
グループ 5	個人 /複数	固定 (競技者)	高	決まったプログラムを演じる演技	AT - パリオリンピックチームアーティスティックスイミングテクニカルルーティン
グループ 6	個人	固定 (競技者)	低	即興演技	BMX - パリオリンピック BMX パーク男子決勝
グループ 7	個人	固定 (競技者/的等)	高	記録を競う個人実技	SH - パリオリンピック走り高跳び男子決勝

#### 1.2.2 「実況」発話

- ◆ 実況：眼前の情報に基づき試合・レースの展開を刻一刻と描写 (Cf. Deulofeu 1999)

- (1) Ratz qui demande le silence (SH)
- (2) les supporters sont en feu (V)

<sup>1</sup> つまり、ラジオなどの視覚情報は伴わないものは除く。

<sup>2</sup> 本研究は JSPS 科研費 JP23K12161 の助成を受けたものです。

<sup>3</sup> 試合・レースの規模は全体で揃っていれば世界規模である必要はないが、世界規模としたのは、本研究が同一の試合・レースに対する日本のスポーツ実況との対照分析も行っていることに起因する。本発表では日本のスポーツ実況について触れない。

<sup>4</sup> 競技タイプを分けた実況発話のアプローチには Mathon2014 があるが、個人技・芸術演技・競争・対戦の 4 種類のみであり、この 4 分類の基準もなかったため、これを参考にしつつ新たに分類した。

(3) et c'est près eh... / d'une demi-longueur d'avance/ déjà /par rapport à Martinenghi, par rapport à Fink, qui sont en bord à bord, mais qui sont derrière<sup>5</sup> (N)

(4) [先頭選手にカメラ切替, 選手名の表示, 残り 3km の旗が見えてくる]  
l'homme de tête à trois kilomètres de l'arrivée (TDF)

◆ 解説: 眼前描写ではない、選手やプレイの評価<sup>6</sup>、競技や戦略の解説、背景説明など<sup>7</sup>

(5) oh il est bien / ah ce transfert est énorme là (BMX)

(6) le tour est long, trois semaines (TDF)

(7) elles ont choisi cette musique / par le... par l'ambiance justement, vouloir donner beaucoup de... / dynamisme (NA)

◆ 対話者志向表現: 実況者・解説者間で相手に、または選手に向けた (かの) ような発話、オーディエンスへのアナウンスなど

(8) ça veut dire que le contact manquerait ? (NA)

(9) L1- on fait le point avec Gaël avec du mouvement dans la descente

L2- ah oui / du sacré mouvement je confirme (TDF)

(10) (Moment où une athlète nationale pousse son adversaire près de la sortie du terrain) fais-la sortir ! (J)

(11) juste après le volley, place au foot sur la chaîne Équipe... (V)

### 1.3 スポーツ実況における動作の描写

◆ スポーツ実況とは、主に眼前で生起するスポーツ選手 (や監督) による動作を記述していくものである<sup>8</sup>

◆ 動作を表す動詞が選手をさす名詞や代名詞を主語にとった発話の多用が予想できる。

(12) [選手がスプリントを始める] *Ayuso va aller faire le sprint pour la deuxième place* (TDF)

(13) [選手が折り返してジャンプ台に向かう] *il revient sur la box* (BMX)

◆ 名詞(14)や前置詞(15)を核とした非動詞発話文が競技 8 グループを合わせたデータでその半数近く (55%) を占めていた<sup>9</sup>。

(14) [宮浦がアタックを決める] *oui avec Kento Miyaura et sa patte gauche* (V)

(15) =(1) *Ratz qui demande le silence* (SH)

◆ 残り半数弱 (45%) の動詞発話文の中には、その主語に中性代名詞 *on* (16) や指示代名詞 *ça* (17) をとるものが散見された。

(16) [フランスがブロックアウトで得点する] *et cette fois on vient chercher le block out* (V)

(17) [選手(たち)が加速する] *et là ça accélère* (N)

<sup>5</sup> スラッシュは音調の下降、ポーズ、意味・統辞上の関係の断絶を表す。

<sup>6</sup> 評価を伴って選手の動きなどに言及するものもあった。これは実況とした。

<sup>7</sup> なお、リプレイは一度見たもの見直しであるため実況 (眼前描写) からは除外した。

<sup>8</sup> 後述するが、実況部分には選手の動作の描写のほか、ボールの動きを描写する発話やある時点での状況やカメラの切り替により認知された対象の言及もあったが、本発表では動作主による動作を描写する発話にのみ注目する。

<sup>9</sup> 各競技により総発話数の数にばらつきがあるため、各競技での割合を平均した。とはいえ、試合によっては実況では自国選手の応援になってしまったものもあったので、質・量の拡充は必須である。

(16') et cette fois l'équipe française vient chercher le block out

(17') et là il accélère

- ◆ なぜここで中性代名詞 *on* や指示代名詞 *ça* が現れるのだろうか。本発表では、特に後者の＜*ça*+ 動作動詞＞型の発話を取り上げ、こうした発話の特性と実況というディスコースにおけるその機能を記述する。

## 2. ＜*ça*+ 動詞＞型の構文

### 2.1 春木 (1983 ; 1991 ; 2014a ; 2014b ; 2016)

- ◆ ＜*ça*+ 動詞＞型の構文 (2014b) からは＜*ça mouille* (*ça*+ 動詞) 構文＞<sup>10</sup>

[気象表現]

(18) *Ça pleut.*

(19) *Ça gèle.*

(20) *Ça mouille.*

[周辺の音響環境を描写する動詞]

(21) *Ça tonne.*

(22) *Ça bourdonne.*

[身体感覚]

(23) *Ça glisse.*

(24) *Ça sent bon.*

(25) *Ça me gratte dans le dos.*

[状況]

(26) *Ça colle.*

(27) *Ça craint.*

(28) *Mais, qu'est-ce que vous avez ce matin ? Ça baille, ça dort...* (春木 1991)

[移動]

(29) *Ça tournait encore beaucoup, ça montait, ça descendait.* (春木 2014b)

- ◆ ＜*Ça mouille*

- 非人称表現であれ人称用法も持つ表現であれ、*ça* は具体的な指示対象を指すのではなく、漠然と発話の状況を指す (春木 1991)<sup>11</sup>。
- これらの発話は実際にその現象が起こっている現場で生起しやすい (春木 2014a)
  - ◇ 口語性 (春木 2014a)
  - ◇ 感嘆性 (春木 2016)
- 認知主体が身体的インタラクションを通して捉えられる現象 (春木 2014a)

＜*Ça mouille*

- ◆ *ça* : 具体的な何かを指示しているのではなく、発話が述べている事態と認知主体を包み込む形で認知の場を指して認知の場に発話を結びつける働き

<sup>10</sup> 分類は取り上げられている表現を網羅すべく発表者がまとめ直したものであり、春木の各論文で様々な観点からなされた分類とは必ずしも一致しない点を留意しておく。

<sup>11</sup> 春木 (1991) は主に *ça pleut* について論じたものであるが、この *ça* の分析は以降の＜*ça*+動詞＞に引き継がれている。

- ◆ 発話全体：事態を引き起こすものと事態の影響を受けるもののいずれをも包み込む形で、認知主体がインタラクションを通して（つまり I モード的に<sup>12</sup>）認知した事態を全体的に表している
  - 事態だけを表す構文
  - いわば自動詞構文と他動詞構文を中和したような構文

## 2.2 <Ça+動作動詞>の位置付け

- ◆ <Ça mouille> 構文：認知主体<sup>13</sup>を取り巻く環境（気象状況、音響環境、状況）や認知主体の動作（移動）、身体感覚に結びつくもので、認知主体はいわば経験主体。
  - (27) ça baille, ça dort は、事態の複数性を表す<sup>14</sup>。つまりあくびや居眠りがあちこち見られる状況に身を置いた認知主体の発話<sup>15</sup>であり、眠気に満ちた空間の体験者といえる。
  - 半過去で道なりを描写する(29) Ça tournait であっても、認知主体は実際の移動の経験を追体験しながらリアルタイム描写しているニュアンスがあり<sup>16</sup>、やはり経験主体。
- ◆ <ça+動作動詞>である(17)において認知主体（実況者・解説者）は眼前の選手の動きを捉えるわけだが、ここでは現象と認知主体の間に身体的インタラクションはなく、現象に対して上記例と同レベルで経験主体であるとは言い難い。
- ◆ この点からは、スポーツ実況における<ça+動作動詞>は<ça mouille>構文の中に位置付けられるようには見えない。
- ◆ 一方で、<ça+動作動詞>は実況内において、それが指す現象の生起とほぼリアルタイムで、つまり認知の場と密着して発話され<sup>17</sup>、後述するが主語 ça の指示対象は曖昧・不明であり、<ça mouille>構文との共通点も見られる。

## 3. スポーツ実況における<ça + 動作動詞>

- ◆ スポーツ実況における<ça + 動作動詞>は、眼前で生起した選手の動作を描写するもの
- ◆ 主語位置を占める ça は動詞の求める項である動作主として人（選手）を直示的に指す用法ではないのか？
- ◆ 実況内で観察された<ça + 動作動詞>では、上記(17)でも確認できるように、特定の個人をさす ça の用法で見られる軽蔑や親愛の情などは見られない<sup>18</sup>。

### 3.1 “Référence nulle” の ça (Maillard 1994)

- ◆ Maillard (1994) のいう“référence nulle”とは、主語のない文（phrase asubjectale）と曖昧な主語を持つ文（phrase à sujet indistinct）の区別を説き、非人称 impersonnel とは何かを論じる中で用いられた用語である。
- ◆ Maillard は主に主語位置を占める ça を取り上げ、曖昧な指示対象も持たない ça があると主張し、これを“référence nulle”の ça と呼んでいる。

<sup>12</sup> 以下で詳述するが、I モードとは中村（2019）による認知モードの原初的モードで、メタ的な認知に発展した D モードと対になる概念。中村の認知モード理論のフランス語における考察に関しては春木（2011;2012）を参照。

<sup>13</sup> 認知主体による発話行為に注目して言い換えれば発話主体

<sup>14</sup> Cf. 春木（2016）

<sup>15</sup> Cf. 春木（2014b）

<sup>16</sup> Cf. 春木（2014b）

<sup>17</sup> 感嘆のニュアンスを非常にしばしば帯びることも指摘しておく。

<sup>18</sup> このことはある種の中立性が求められる実況報道という性質からも当然のことと言える。但しこの中立性は、発言の仕方についてであり、身近なまたは人気の対象がより積極的に取り上げられることは妨げられていない。また決勝や準決勝など重要度・注目度の高い試合・レースにおいて、自国の選手・チームが山場を迎えた局面では、内容に対する中立性も常には保たれてはいなかったことを付け加えておく。

(30) *ça va péter*

(31) *ça me bourdonne dans les oreilles !*

(32) *ça bouchonne (=il y a des bouchons)*

(全て Maillard 1994, 50)

(31') \**Quelque chose me bourdonne.*

(32') (*ç*) *La circulation bouchonne (=il y a des bouchons)*

(Idem.)

- ◆ Maillard の主張のポイントは、“*référence nulle*”用法の *ça* は動詞の直前の項（つまり主語）に指示対象を提供していないこと、つまり統辞的な主語の機能を果たしていないということである。このことをテーマ化や強調ができないことから例証している<sup>19</sup>。

(31'') \**Ça, ça me bourdonne ... ! / \*C'est ça qui me bourdonne ... !*

(32'') \**Ça, ça bouchonne / \*C'est ça qui bouchonne*

(Idem.)

- ◆ Maillard の“*référence nulle*”の記述において、*ça* が指し示すものが存在しない、あるいは曖昧であるという判断自体に、どこか曖昧さが残る。
- ◆ しかし“*référence nulle*”の *ça* + 動詞>において、*ça* が動詞の項を満たす役割を果たしていないという指摘は<sup>20</sup>、これから検討する<*ça* + 動作動詞>の用例にとって、きわめて示唆的。

### 3.2 スポーツ実況における“*référence nulle*”の *ça*<sup>21</sup>

- ◆ スポーツ実況における<*ça* + 動作動詞>の *ça* 以外のいかなる要素も主語位置に容認しない発話

(33) [先頭選手のプロフィール解説が終わったところ、Fink を含めた選手達の 2 位争いが激化してくる]

Le commentateur : *ça revient pour Fink un peu (N)*

(34) [動きがなく、発話に間ができる - 選手 (ポガチャル) が集団から飛び出す]

L'expert : *et ça attaque pour Pogacar (TDF)*

(35) [3 人の追走選手 Ayuso, Rodrigues, Roglic が 2 位独走中の選手に追いつこうとしている]

Le commentateur : *ça revient avec le trio... /Ayuso.../ Rodrigues, Roglic (TDF)*

(33') [先頭選手のプロフィール解説が終わったところ、Fink を含めた選手達の 2 位争いが激化してくる]

Le commentateur : \**Fink revient pour Fink un peu*

(34') [動きがなく、発話に間ができる - 選手 (ポガチャル) が集団から飛び出す]

L'expert : \**et Pogacar attaque pour Pogacar*

(35') [3 人の追走選手 Ayuso, Rodrigues, Roglic が 2 位独走中の選手に追いつこうとしている]

Le commentateur : \**le trio revient avec le trio... /Ayuso.../ Rodrigues, Roglic*

<sup>19</sup> *ça va péter* の *ça* が漠然とした雰囲気ではなく、何らかのより具体的な状況や関係などを指示する場合 (*référence indistincte*) の場合は、もちろん“*référence nulle*”ではないので、*ça, ça va péter* とテーマ化できる (Idem)。

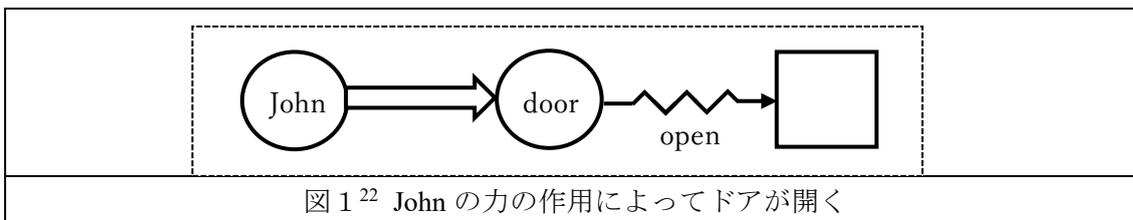
<sup>20</sup> 踏み込んだ議論はしていないが、動作主をとる動詞においては *ça* の使用が動作主を隠すとも述べている。

<sup>21</sup> 以下ではより多くの事例を検討するため、日仏スポーツ実況対照分析用のコーパスを越えて収集した事例を挙げている。

- ◆ ça が別の動作主を導入しているとも考えられない。
  - 指示対象を持たない、Marillard のいう “référence nulle”である。
  - ただしテーマ化や強調といった Maillard の提案するテストは適さない。

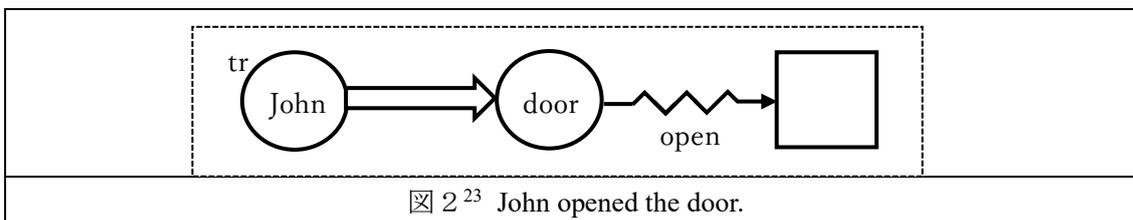
### 3.3 <ça + 動作動詞>の認知構造 (Cf. 中村 2019)

- ◆ 認知文法の観点で言うと主語とは、一般的にトラジェクターのことである。トラジェクターとはある事態に対して認知像を形成する際に、直感的な把握の場（認知の現場）を離れて、言語ごとに一定の傾向を持つ何らかのスキーマに落とし込んで事態を捉えなおす「Dモード」という認知モード上の概念である。
- ◆ このスキーマは動詞主導で構築される：

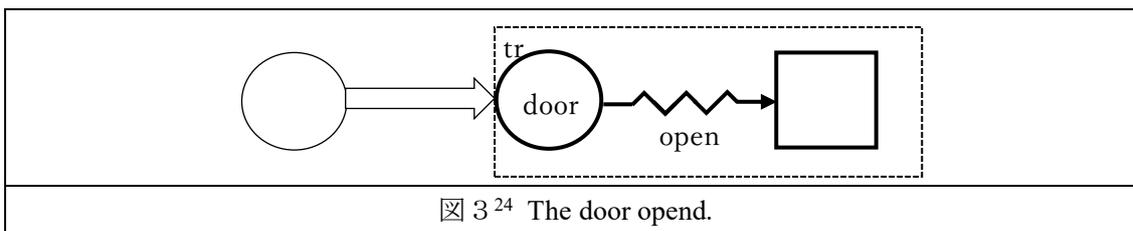


- ◆ 丸が事態の参与項、二重矢印が力の作用、波形矢印は変化を、四角は結果状態を表す。
- ◆ このようなスキーマを持つ事態について、認知主体がどの部分に注目（プロファイル）するかで、実際の発話の形式が変わる。このプロファイルの際に、際立ちの最も高い参与体として捉えられるのがトラジェクターであり、SVO 言語においてこれは主語という形で言語化される。

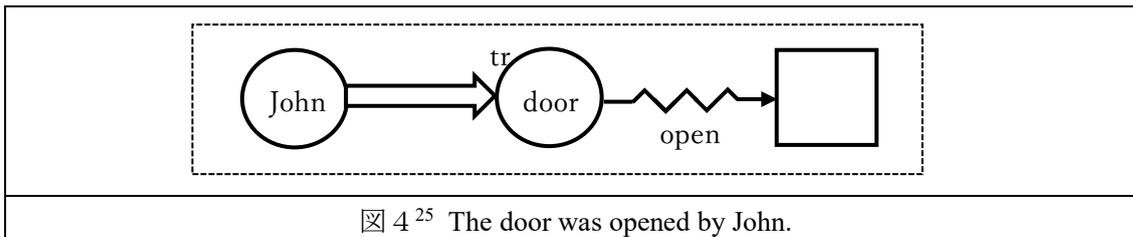
[事態をジョンの行為とプロファイル]



[事態をドアの変化とプロファイル]



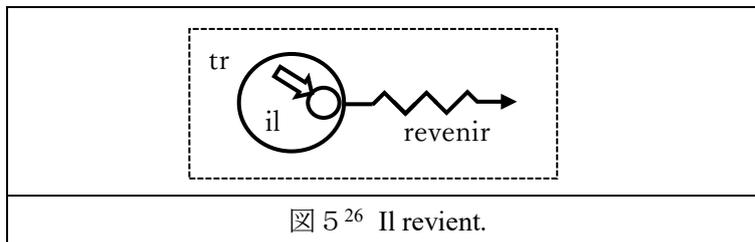
[事態をドアが被った力の作用プロファイル]



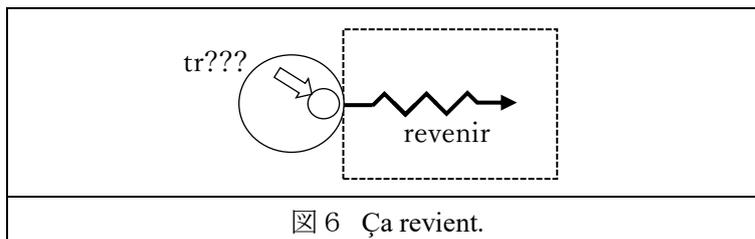
<sup>22</sup> Idem., p.65 から一部省略して記載。  
<sup>23</sup> Idem., p.65 および p.241 を参考に作成。  
<sup>24</sup> Idem., p.65 および p.78 を参考に作成  
<sup>25</sup> Idem., p.65 および p.241 を参考に作成。

- ◆ 同一の事態は多様に捉えることができ、スキーマの全ての要素がプロファイルされる必要はなく、その範囲「スコープ」(点線四角)は変化する。

- ◆ revenir のような自動詞の基本のスキーマは以下のようになる：



- ◆ (33)のプロファイルの図式化



- ◆ Ça は言語形式上主語位置、つまりトラジェクターを示す位置にあるものの、何も指さないため、何が何に力を加え、何が revenir という動きをとる変化を被っているのか不明。
  - revenir という動きのみがプロファイルされ、事態の参与体(トラジェクター)はスコープの外に置かれている。
  - トラジェクター=主語は不在のまま認知像が形成されているといえる。

ケース 1：動詞の表す動作の潜在的な動作主の正体・範囲が不確定な <ça + 動作動詞>

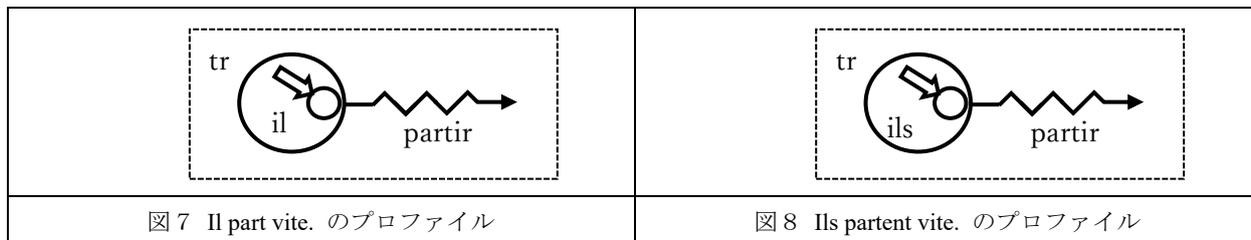
(36) [競技者複数；解説は有力選手の説明をしている、画面には 50m 地点でターンする選手達が水中に見える]

L'expert :[...] mais le champion du monde en titre, il a envie de montrer qu'il est présent.../ **et ça part vite**<sup>27</sup>

(N)

➔ 1 人の動作？ 選手全員(レース全体)？ 不特定多数<sup>28,29</sup>？

➔ 動作？ 状況 (un redémarrage rapide / à toute vitesse / et sur une vitesse affolante)？

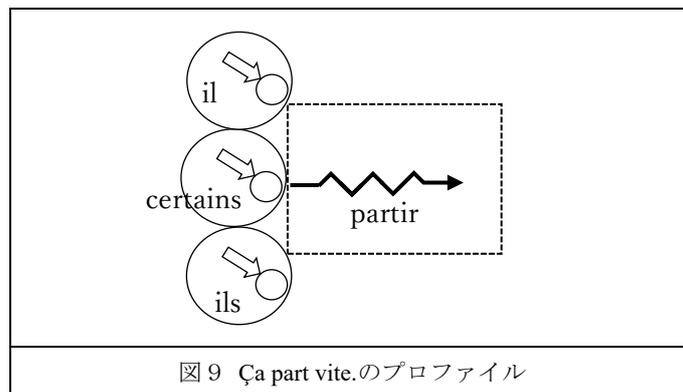


<sup>26</sup> Idem., p.78, p.139 を参考に作成。

<sup>27</sup> (33)において選手はすでに出発しており、ここで現在時制で使用されている partir は「出発する」、つまり動作を開始する意味ではなく、選手たちが「飛ばしている」状態を表している。インフォーマント 2 名はこれを activité, action en cours であると指摘した。

<sup>28</sup> 事例の解釈については 20 代から 50 代の 9 名のフランス語ネイティブに行ったインタビューを参考にした。

<sup>29</sup> インフォーマントの 1 名は、名詞・代名詞では「1 人かも複数かもしれない」曖昧性を保ったまま動作を表す <ça + 動作動詞> のニュアンスは出せないと指摘した。



・動作が誰によるものか把握しきれていない場面での事例

(37) [競技者複数；俯瞰画面で集団後方から脱落する選手が見える]

Le commentateur : ouais, on a un groupe d'une dizaine de marcheurs qui est en train de se détacher.

[30 秒の沈黙中に画面が俯瞰から切り替わり先頭選手を前から移すアングルに変わる]

L'expert : *ça se relaie en tête de course, hein* (20km marche, 以下 20km と表記)

・文脈で特定の選手が話題上がっており、動作が誰によるものか把握できそうな場面での事例

(38) Le commentateur : passage au 6ème kilomètre avec, alors attention, Massimo Stano avant poste, avec José

Luis Doctor, le mexicain / et Albaro Martín aussi /oui, l'espagnol, l'un des grands favoris en 4ème position

/ *là ça accélère / ça accélère avec Massimo Stano, le champion olympique en titre* (20km)

◆ *Ça* の指示対象の曖昧性については既に Corblin (1987)、Maillard (1994) など多くの文献で指摘されているが、図 9 で肝心なのは、曖昧であろうとなかろうと *ça* の指示対象の正体がなんなのかではない。

- 複数性を積極的に表すというよりも、動作主を把握しきらないまま動きのみをスコープ (図の点線四角) に入れて認知像が形成されていることを表している。
- 単数動作主読み・複数動作主読みなどの可能性は受け手による、場の参照を通した解釈の結果ではないか。

ケース 2 : 事態のプロファイル (他動詞・自動詞など) が不確定な *ça* + 動作動詞

(39) [リプレイ中]

Le commentateur : voilà, une petite marque d'agacement pour Caio Bonfim

[画面が生中継に戻り Caio Bonfim を含むレース先頭を写す]

mais *ça* continue (20km)

(40) [演技中の選手の昨日の演技について]

Le commentateur : il nous l'a proposé hier aussi aux qualifications

[コメンテーターの発言中に選手が画面を高速で横切っていくのが見える]

L'expert : *ça va trop vite* (BMX)

(41) =(38) Le commentateur : passage au 6ème kilomètre avec, alors attention, Massimo Stano avant poste, avec José Luis Doctor, le mexicain / et Albaro Martín aussi /oui, l'espagnol, l'un des grands favoris en 4ème position / **là ça accélère**<sup>30</sup> (20km)

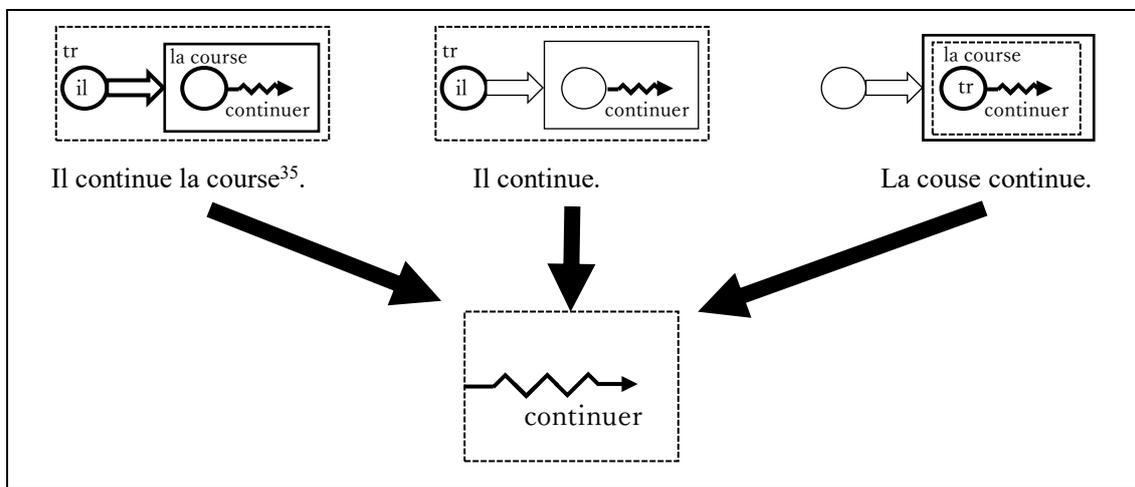
(42) L'expert : [予選より力強い泳ぎがされている様を名詞 **beaucoup plus d'investissement** で発話 - 先頭 3 選手の秒速が表示される] **et là, ça accélère** (N)

➡ 「試合、ある選手、両方、またはそれ以外を話題にしているのか判別することは困難<sup>31</sup>」

表 1 : (39)(40)(41)の文意の多義性の調査結果

	ça の差し得るもの <sup>32</sup>		両方	どちらでもない
(39) ça va trop vite	il 4 /9	le passage 3 /5 <sup>33</sup>	2 /5	2 /5
(40) ça continue	il 5 /9	la course 9 /9	5 /9	0 /9
(41) ça accélère	ils 8 /9 <sup>34</sup>	la course 2 /9	2 /9	0 /9
(41) ça accélère (s')	ils s' 1 /9	la course s' 8 /9	1 /9	0 /9

◆ 解釈が多義的な<Ça + 動作動詞>は、図 10 で見られるように、一つの事態に対して可能な多様なプロファイルに通底する作用部分（矢印で示される力の移動または波形矢印で示される変化）のみを捉えた認知像形成を行っている。



<sup>30</sup> なお動詞 **accélérer** の自動詞的用法については、自動車を暗に目的語とした絶対用法（辞書によっては自動詞用法）のみが TLFi、ロベール仏和辞典に記載されており、人を主語にした自動詞用法の言及はない。ただし、人を主語にした「加速する」はスポーツ実況では広く使用され、インフォーマントからも自動詞用法での<人+accélérer>が文法的に非文であるとの指摘は上がらなかった。**accélérer la vitesse** の絶対用法的なものとしての自動詞用法ではないかと考えられる。

<sup>31</sup> 20 代インフォーマントのコメントより。

<sup>32</sup> 「Ça が指しえるものかどうか」の判断について、元の発話の **ça** のニュアンスを維持できているかも考慮に入れて判断してもらった。しかし、回答に影響を与えないよう **ça** の指し得るもの、**ça** のニュアンス自体に先取りして触れなかったため、文脈に合うかどうかで判断が下された可能性は排除できない。

<sup>33</sup> **Le passage** は調査途中で追加したため、母数は 4 となった。

<sup>34</sup> インフォーマントからは(37)で **ils** を容認したものの、**ils** とした場合は前文脈で言及された選手を指示するのに対し、**ça** はその中の何人かやその他の何人かも含んだ加速を表し、ニュアンスには違いがあるとの指摘があった。注 20 でも述べたが、**ça** のニュアンスを維持した書き換えとして容認できるかと問うアンケートであったが、文脈に合致するという観点で容認すると選択することがやはりあることを示している。(37)において **ça** のニュアンスを維持したものとしては **ils** の容認度は下がる可能性がある。

<sup>35</sup> 中村 (2019, p.81-82) を参考に作成。

図 1 0 Ça continue. のプロフィール

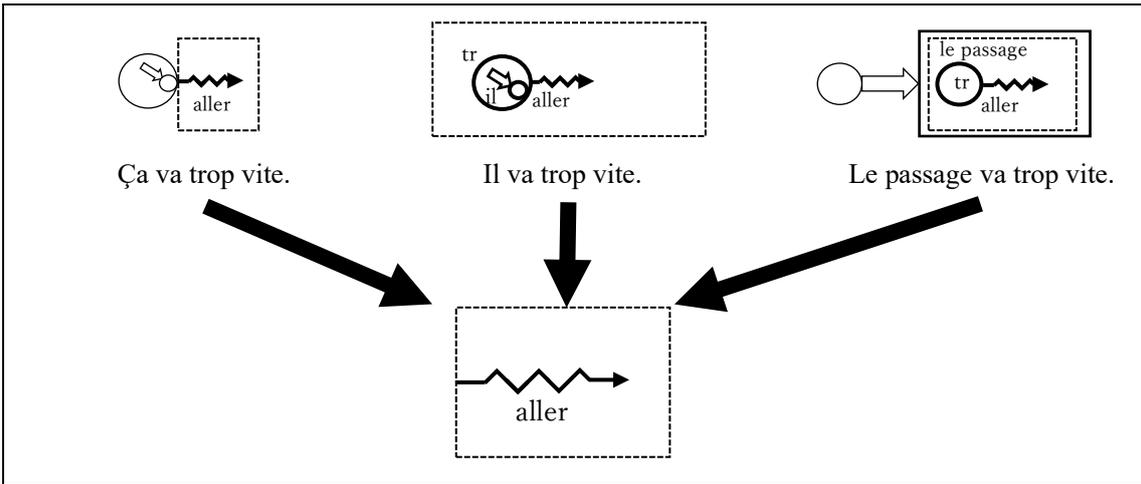


図 1 1 Ça va trop vite. のプロフィール

- ◆ 図 1 0～1 2 では<ça+動作動詞>がそもそも異なるスキーマをとる事態に対応し得ることが見て取れる。
  - スキーマにおけるスコープの多様性に広く対応し得るだけではない。
  - スキーマにとる事態の取り直しという認知形態をそもそもとっていないと考えられる。

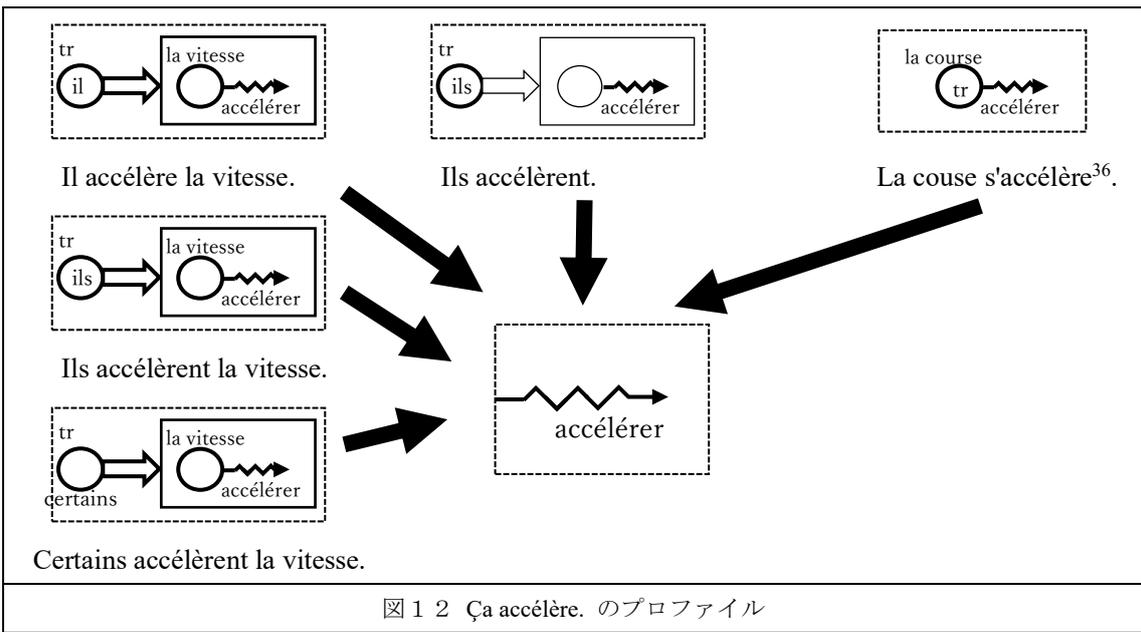


図 1 2 Ça accélère. のプロフィール

- ◆ 事態を動作主の動作として表すのか、自動詞的動きを表すのかの線引きがぼかされ、どちらともつかない形で提示。
  - 「いわば自動詞構文と他動詞構文を中和したような」<ça mouille 構文>（春木 2014a）と同じ。
  - 文全体の多義性はやはり受け手による、場の参照を通じた解釈の結果と考えられる。

ケース 3：動詞の本来の意味とは異なるニュアンスを発揮する<ça + 動作動詞>

(43) [ネット際でのヘアピンショット（低い軌道での羽の打ち返し）の応酬]

<sup>36</sup> Idem., p.210、全体と部分が限りなく同化した「再帰中間構文の認知構造」The sun showed itselfを参考に作成。

Le commentateur : *ça se bagarre*<sup>37</sup> *juste en bas* (sic.) (Badminton)

(44) [日本対フランス戦でラリーが続く中、日本のチャンスボールとなる]

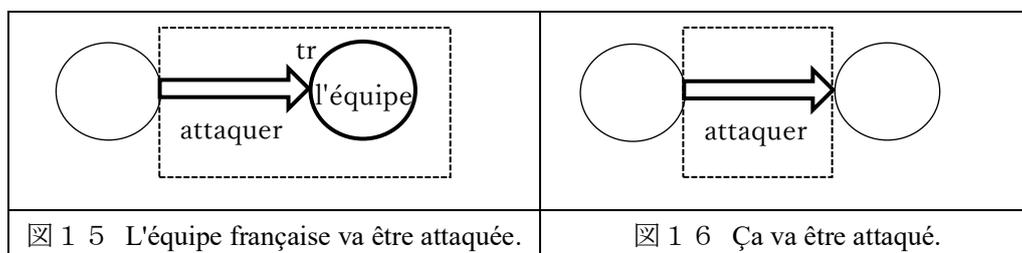
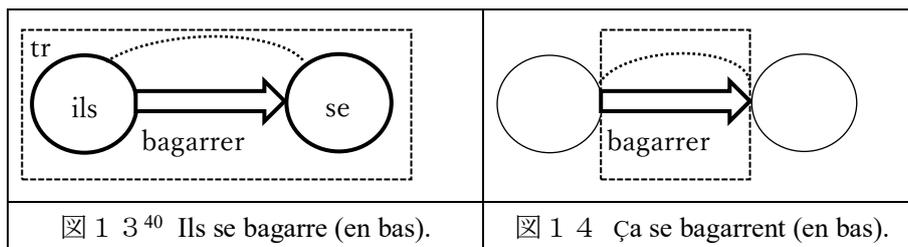
Le commentateur : c'est encore défendu par les Japonais / *et ça va être attaqué* (V)

➡状況からはどの主体（選手・チーム）の動作についての言及か特定できるが、実際に選手名や代名詞で置き換えると不自然・文意が変わる（「物理的動作のイメージが強まる」<sup>38</sup>）。

➡状況読みの可能性。

(43)について : c'est tendu en bas / c'est une bagarre juste en bas ! / les échanges sont tendus et haletants

(44)について : et c' est à ce moment là que la tension monte / et là, les choses se compliquent / et là, la compétition commence à être tendue<sup>39</sup>



- ◆ 力の作用（二重矢印）部分のみがスコープに入ると考えると、力が参与体に及んだところまでは認知像が形成されないことがわかる。
  - これが名詞・代名詞をとった場合との物理的動作のイメージの違いにつながっていると考えられる。
  - ただし、このケースでは(43)では相互の動作イメージが、(44)では力の作用の受動方向の向きは把握されている。このような認知モデルについては再考が必要である。

・ スコープ内の動作のイメージが完了の可能性を持つ事例

(45) [競技者 1 人 ; Hamish Kerr が手をあげ、開始を告げる開始を告げる足踏み]

Le commentateur : alors Hamish Kerr... oui [走り出す] Hamish Kerr... peut-être pour le titre olympique.....

[ジャンプし、バーを越える] *eh oui ça paaaasse !*<sup>41</sup> Hamish Kerr, champion olympique ! (HA)

➡状況から見れば Hamish Kerr passe la barre という事態が実際にあったと考えられるが、「成功（パス）だ c'est passé」という物理的動作というよりは状況を捉えた読みが上げられた。

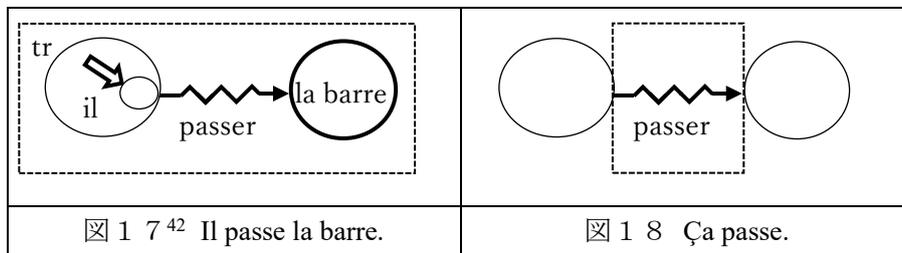
<sup>37</sup> 動詞 bagarrer は古風な自動詞的表現として「(スポーツで) 熱戦を演じる」(ロベール仏和大辞典)の意味が記載されているが、*Le Petit Robert* (version 10.0, 2024 年更新)ではこの用法の掲載はなく(なお TLFi では 1936 年の例が掲載)、代名動詞相互用法としては「殴り合う se battre, se castagner」、転じて「口論する se quereller」の意味のみが記載されていた。

<sup>38</sup> 30 代インフォーマントによる指摘。

<sup>39</sup> 同様の局面において日本語で、何が、誰がとも言わず「来るぞ！」と切迫した状況を表すのと類似している。

<sup>40</sup> 中村 (2019, p.71; 209) を参考に作成。

<sup>41</sup> スラッシュで示している通り、ここには音調の下降と短いポーズがある。音声分析は今後の課題である。



- ◆ (45)では *passer* という動作の対象 *la barre* も言語化されていない。これを図式化した図 1 8 を見れば、バーという参与項も、動作主参与項も、その認知像が形成されておらず、やはり動作イメージのみがスコープに入った認知像形成がされていることがわかる。
  - 「成功（パス）だ *c'est passé*」は完了の概念が前提にあるため、動作のみをプロファイルしたく *ça + 動作動詞* が、なぜこのニュアンスを持つのかについては今後の課題とする。
  - (45)は上記(33) *ça revient pour Fink* のように *pour*<sup>43</sup>を用いて動作の主体を後から導入できることが確認されている：

(49') *eh oui ça passe pour Hamish Kerr !*

### 3.4 小括

- ◆ *ça* はどれも作用部分（矢印で示されてる力の移動または波形矢印で示される変化）のみがプロファイルされていた。
  - トラジェクター（つまり主語）の像はまだ形成されておらず、「動きがある」ことだけが捉えられている。
  - そもそも、動詞のスキーマに落とし込んだ事態の捉え直し、つまり D モード認知<sup>44</sup>が行われていないと考えられる<sup>45</sup>。
- ◆ 「動き」は直感的に認知の場で捉えられたまま提示されている ➡ I モード認知。
  - この点で *ça mouille* 構文の一つとして数えることができる。

## 4. Ça の機能

- ◆ *ça mouille* 構文では、*ça* は事態と認知主体を包み込む場を指し、事態（発話内容）をそこに位置付けてい

<sup>42</sup> *Idem.*, p.78, p.139 を参考に作成。

<sup>43</sup> この *pour* は「もう無理だ」という状況に対して使う *ça va malheureusement pas le faire* などの後で、その状況に関わる主体を導入する：[自国の選手がもう勝てそうもないとなった状況で] *ça va malheureusement pas le faire pour elle... / ? elle va malheureusement pas le faire...*

<sup>44</sup> なお事態の捉え直しをするということは認知主体の視点は認知の場から離れる（外置 *displacement* する）ことを意味する（下図）。I モードの図では認知主体（C）は何らかの外的・内的刺激（インタラクション、図内の二重線矢印）を受けた場で、その中に認知像（四角）を形成（点線矢印）しているが、D モードの図では、認知像形成の際に捉え直しがあり、それが上向の点線矢印で示されている(Cf. 中村 2019, 329-333)。



<sup>45</sup> 「*ça* を主語とすることで、人称動詞がトラジェクターの言語化という統語的桎梏からも解放された」（春木 2014a, 75）という指摘はこのことを認知ではなく言語の側から捉えたものと言える。

た（春木 2014a）。

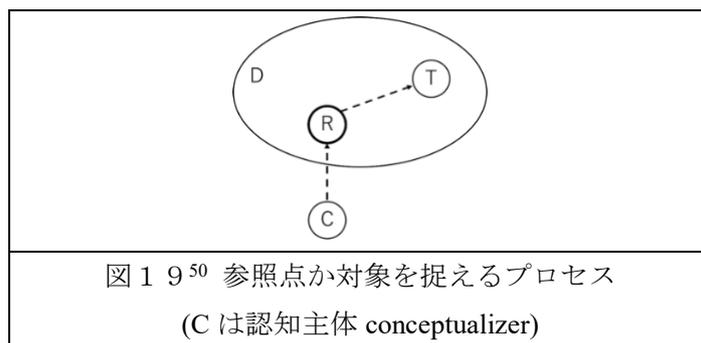
➤ こうした *ça* の発話における機能を認知のプロセスから見ると、*ça* は「参照点」。

◆ 参照点 (reference-point) : 認知主体が認知対象 (target) にアクセスする際に「手がかり」<sup>46</sup>とするもので、認知主体にとって身近なものが担う。

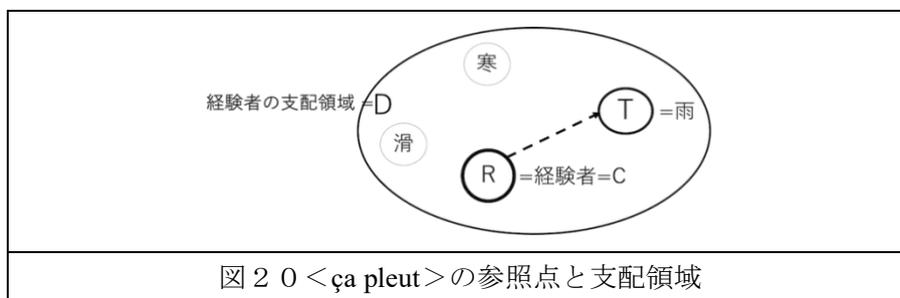
➤ 何を身近とするかは、状況や認知主体の背景知識にもよるが、一般的には人以外よりは人、部分よりは全体、抽象物よりは具象物、見えないものよりは見えるものといった一定の傾向がある<sup>47</sup>。

➤ この身近なものは、参照点となると、それに近接するものやそれが包含するものを含み込んだ広がり (支配領域 *dominion*) を持って機能する。

➤ 街中で人と待ち合わせをして、まず店や目立つ看板を、それからその周りを探して相手を見つける際の、店や看板は参照点といえる<sup>48,49</sup>



◆ 認知主体が事態の経験者<sup>51</sup>である <*ça mouille*> 構文では、認知主体 C が経験者としての自分を参照点 R とし、その内面から周辺環境まで、さまざまな認知対象となりえるものを含む支配領域 D の中で、雨や音、痒みなどの認知像 T を形成する認知プロセスを表しているといえる



◆ ある支配領域で認知像を形成するとは、事態を支配領域内の視点で捉えること。

➤ <*ça pleut*> では支配領域内の経験者の経験する雨がプロファイルされる (図 2 1)。<*ça pleut*> が感嘆や比喩的意味合いを帯びるのはこのためといえる

<sup>46</sup> Cf. 中村 2019, 345.

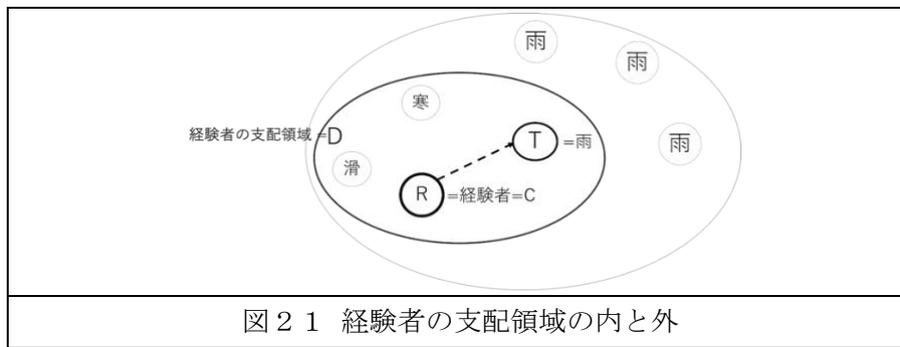
<sup>47</sup> 詳しくは Langacker (1993)における *salience principle* を参照。

<sup>48</sup> この場合、その周辺が *dominion*、相手が *target* である。

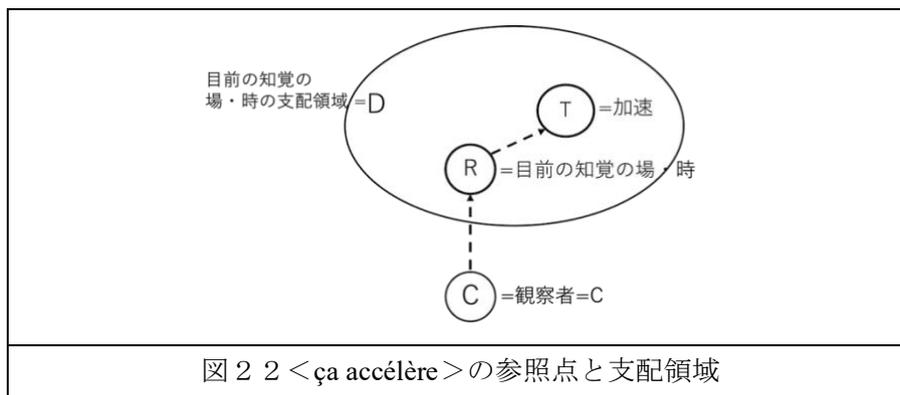
<sup>49</sup> 参照点の機能については上記中の Langacker (1993)の他、濱田 (2023)の記述がわかりやすい。

<sup>50</sup> Cf. Langacker 1993, 6.

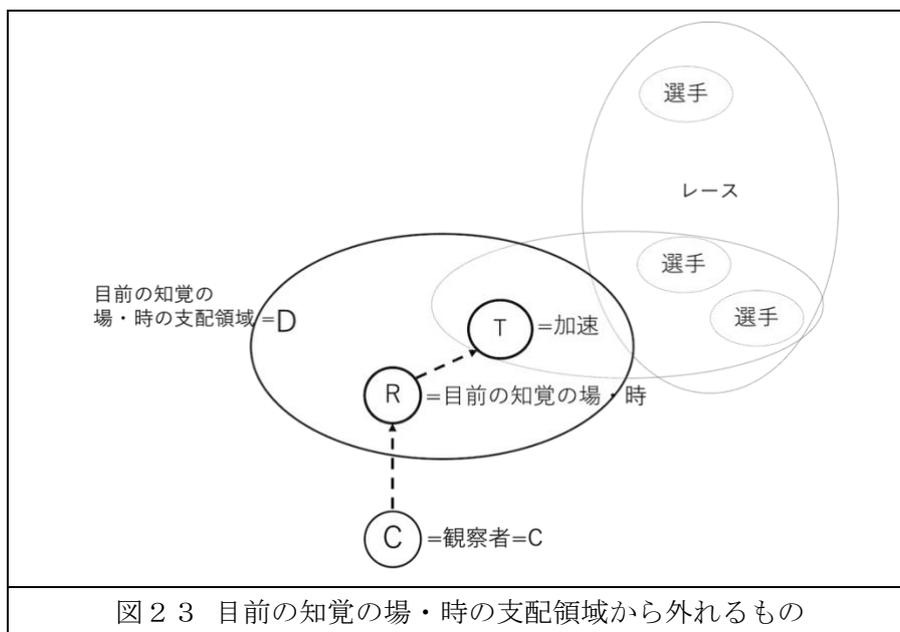
<sup>51</sup> ここでいう「経験者」とは実際の経験のことで、プロファイルされた参与項という概念での経験者のことではない。



- ◆ 参照点は認知主体にとって身近なものであれば、認知主体自身や、認知主体を包み込む場でなくとも良い。認知主体のその時・その場の知覚に対応して生起する <ça + 動作動詞> であれば、参照点 R は目前の知覚の時・場と考えられる（図 2 2）。



- ◆ 「加速」という事態は複数の要素を持って構成されるが、<ça accélère> では、観察者の目前の知覚の場・時の支配領域内で「動き」のみのプロフィールが行われる（図 2 3）。



- ◆ 目前の知覚の場・時は、発話者である認知主体（=観察者）と発話の受信者の間で多かれ少なかれズレが生じる可能性。
  - これが <ça accélère> の理解として、漠とした加速の提示から特定の選手やレースの加速の描写があり得ることを説明する。

- ◆ <ça + 動作動詞>を含む<ça mouille>構文は、ça という形で参照点を構文に組み込んでおり、事態を、ça がマークする参照点の支配領域内の視点で捉えることを必須にしている。
- ◆ 「ça は時に文全体を構築する (il [=le pronom ça] construit parfois toute la phrase)」というインフォーマントによる直感や、春木 (2014a, 74)による「<ça + 動詞>はそれ以上に分析できず」という指摘はこのこと
- ◆ <ça mouille>構文では認知主体 C は参照点 R と重なりあって認知対象と同じ領域内に位置している。一方 <ça + 動作動詞>では認知主体 C と参照点 R は一致せず、認知対象と領域を共有しない。これが認知事態とのインタラクションの有無に関する両者の違い。

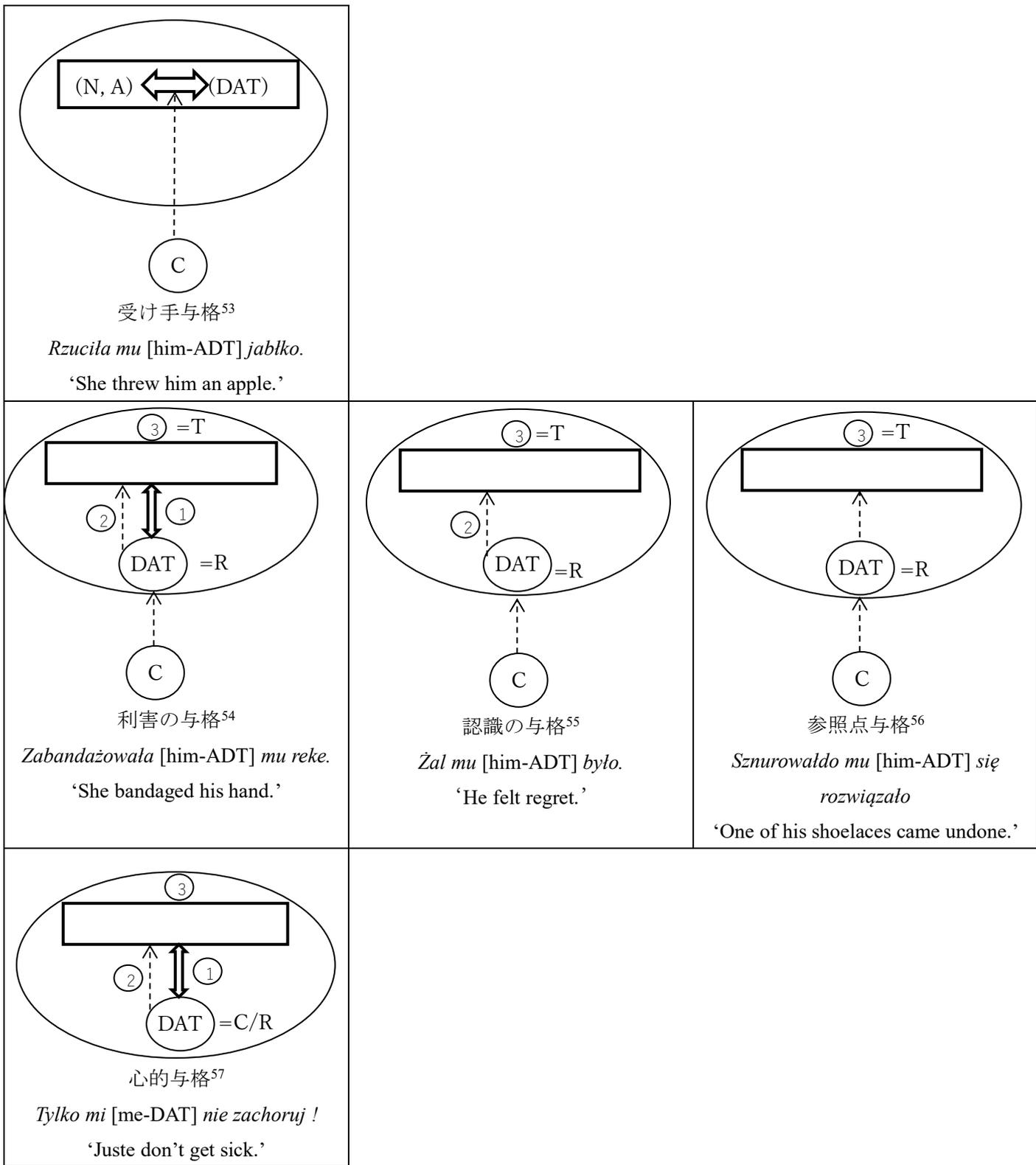
#### 5. スポーツ実況における<ça + 動作動詞>の<ça mouille>構文に対する位置付け

- ◆ <ça mouille>構文と<ça + 動作動詞>は認知事態との身体的インタラクションの有無では違いを見せている。
- ◆ <ça + 動作動詞>の<ça mouille>構文に対する位置付けを、中村 (2019, §9) による外置 (D モード化) の程度と主体化の過程をベースにした与格の意味地図の分析アプローチを援用して行う。
- ◆ 中村はヴェジビツカ<sup>52</sup>によるポーランド語の与格の一連の用法を認知モード、とりわけ参照点の観点から再整理。
  - ポーランド語の与格には「彼女は彼にリンゴを投げる」の「彼に」のように、統辞的機能を担ういわゆる受け手与格の他、「彼女は彼に包帯を巻いてあげた」(利害の与格)や「私(のため)に病気にならないで」(心的与格)など、動詞の構文からは要求されない与格の使用が多様。
  - これらは認知言語学的に言えば動詞のスキーマに嵌まらない要素で、参照点である。
- ◆ 中村はポーランド語与格がさまざまな構文の中でニュアンス発揮したり、その意味を希薄化させる様子を認知プロセスとして捉え、以下のように図式化した。

---

<sup>52</sup> Wierzbicka 1988

[中村によるポーランド語与格の意味地図]



◆ 参照点と認知主体の多様な関係 (常に一致するわけではない)

- 認知主体と一致しない参照点から認知対象を捉えるとは、支配領域内の視点への視点移動を意味する。

<sup>53</sup> 図は p.289 例は p.292 から引用。

<sup>54</sup> 図は p.289 例は p.291 から引用。

<sup>55</sup> 図、例ともに p.297 から引用。

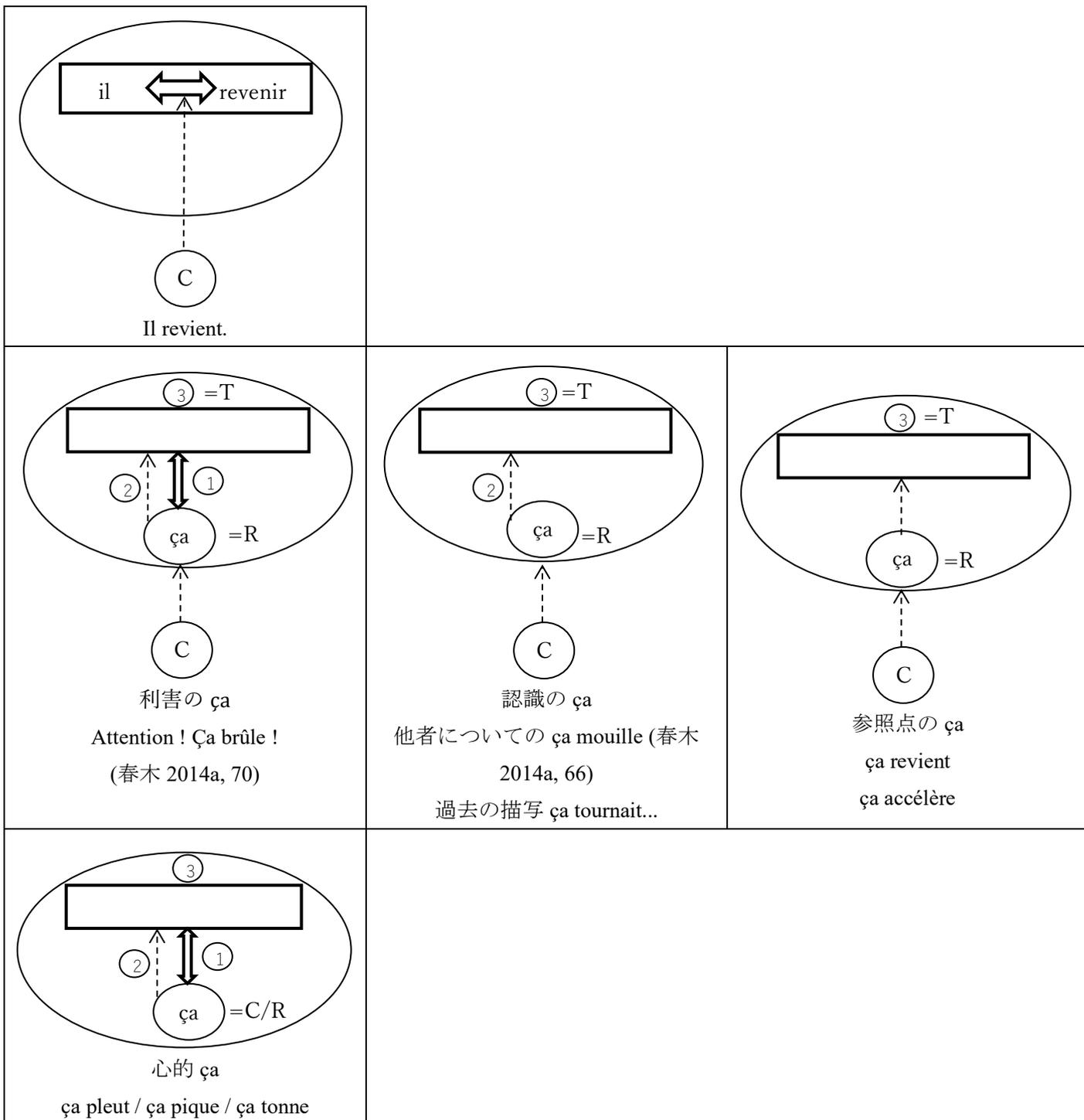
<sup>56</sup> 同上。

<sup>57</sup> 図は p.288 例は p.290 から引用。

➤ 支配領域内の視点と認知対象はある意味で認知の場を共有しているといえる。

◆ 参照点の支配領域が持つ観点 (参照点と認知対象と関係) の多様性: 経験、認識、近接関係

[ça + 動作動詞>を含む<ça mouille>構文の意味地図]



◆ 参照点と認知主体の多様な関係と参照点の支配領域が持つ観点の多様性から<ça mouille>構文を捉え直すと、<ça mouille>構文の多様性が見えてくる。

➤ <ça + 動作動詞>型の発話が異例な位置を占めているわけではない。

➤ 参照点と認知主体が一致し、認知主体と認知対象のインタラクションがある認知の場での<ça mouille>型の発話は、<ça mouille>構文の 1 事例であるといえる。

## 6. おわりにかえて：スポーツ実況における <ça + 動作動詞> の機能

### ◆ 目前の知覚の場・時（目前のその瞬間の試合・レースの場）の参照

- ・解説から現場実況に戻って

(46) =(40) [コメンテーターの発言中に選手が画面を高速で横切っていくのが見える]

L'expert : *ça va trop vite* (BMX)

(47) =(33) [先頭選手のプロフィール解説が終わったところ、Fink を含めた選手達の 2 位争いが激化してくる]

Le commentateur : *ça revient pour Fink un peu* (N)

- ・リプレイから生中継映像に戻って

(48) [Caio Bonfim についてリプレイを見てコメント - 画面が生中継に戻り Caio Bonfim を含むレース先頭を写す]

mais *ça continue* (20km)

### ◆ 事態を動詞のスキーマで捉えないまま「動き」のみを提示

- ・時間的・心理的緊急性のある場面

(49) =(34) [動きがなく、発話に間ができる - 選手 (ポガチャル) が集団から飛び出す]

L'expert : *et ça attaque pour Pogacar* (TDF)

(50) =(44) [日本対フランス戦でラリーが続く中、日本のチャンスボールとなる]

Le commentateur : *c'est encore défendu par les Japonais / et ça va être attaqué* (V)

(51) =(49) [競技者 1 人 ; Hamish Kerr が手をあげ、開始を告げる]

Le commentateur : *alors Hamish Kerr... oui* [走り出す] *Hamish Kerr... peut-être pour le titre olympique.....*

[ジャンプし、バーを越える] *eh oui ça paaaasse !*<sup>58</sup> *Hamish Kerr, champion olympique !* (HA)

- ・認知事態の全貌が不確定な時

(52) =(37) [競技者複数 ; 俯瞰画面で集団後方から脱落する選手が見える]

Le commentateur : *ouais, on a un groupe d'une dizaine de marcheurs qui est en train de se détacher.*

[30 秒の沈黙中に画面が俯瞰から切り替わり先頭選手を前から移すアングルに変わる]

L'expert : *ça se relaie en tête de course, hein*

### ◆ 意味のゆとり

- ・実況における絶え間ない描写の要請

(53) (43) [ネット際でのヘアピンショット (低い軌道での羽の打ち返し) の応酬]

Le commentateur : *ça se bagarre*<sup>59</sup> *juste en bas* (sic.) (Badminton)

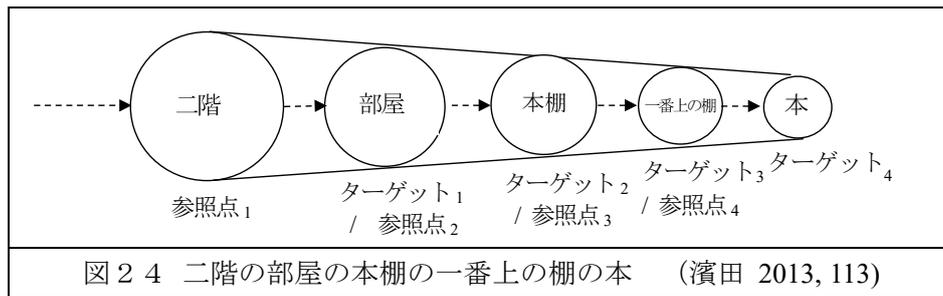
### ◆ スキーマを持たない閉じない発話

※事態をある動詞スキーマに落とし込んで捉え直す場合、事態は多かれ少なかれその全貌が捉えられる。事態

<sup>58</sup> スラッシュで示している通り、ここには音調の下降と短いポーズがある。音声分析は今後の課題である。

<sup>59</sup> 動詞 *bagarrer* は古風な自動詞的表現として「(スポーツで) 熱戦を演じる」(ロベール仏和大辞典) の意味が記載されているが、*Le Petit Robert* (version 10.0, 2024 年更新) ではこの用法の掲載はなく (なお TLFi では 1936 年の例が掲載)、代名動詞相互用法としては「殴り合う *se battre, se castagner*」、転じて「口論する *se quereller*」の意味のみが記載されていた。

の認知像を段階的・持続的に形成できない。一方、図～のように参照点は連鎖することが可能<sup>60</sup>。



・対象認知が継起する場面

(54) =(35) [3 人の追走選手 Ayuso, Rodrigues, Roglic が 2 位独走中の選手に追いつこうとしている]

Le commentateur : ça revient avec le trio... /Ayuso.../ Rodrigues, Roglic (TDF)

➡場の参照→動作→動作に含まれる要素の塊→要素の内訳

・状況が刻一刻と変化

(55) HUSKE Torri l'américaine qui a vraiment fait de job/ et là ça revient très très fort pour la chinoise à la ligne numéro 4 qui va certainement passer en tête à la mi-course (N)

➡場の参照→動作→動作に含まれる要素→要素の位置→要素の動作（予測）

- ◆ <ça+ 動作動詞>の特性は、視聴者を試合・レースの現場に引きつける、とめどなく流れる試合・レースの展開をリアルタイムで描写していくというスポーツ実況にフィットしている。
- ◆ スポーツ実況で多く見られる非動詞文、<on+ 現在形動詞>型の発話も、同様の特性を持つのか。
- ◆ 必ずしも同様の言語形式を持たない日本語との実況比較において、その認知プロセスの特性からアプローチできることが考えられる。

<参考文献>

Deulofeu, J. (2000) “Les commentaires sportifs constituent-ils un “genre”, au sens linguistique du terme ?”, in Bilger, M. (ed.), *Corpus: Méthodologie et applications linguistiques*, Champion.

Corblin, F. (1987) “Ceci et cela comme formes à contenu indistinct”, *Langue française* 75, 75-93.  
 <[https://www.persee.fr/doc/lfr\\_0023-8368\\_1987\\_num\\_75\\_1\\_4666](https://www.persee.fr/doc/lfr_0023-8368_1987_num_75_1_4666). 2025 年 4 月 10 日最終閲覧>

濱田英人 (2013) 「日英語話者の視点構図と事態内参与者の言語化/非言語化」『文化と言語: 札幌大学外国語学部紀要』78, 75-94.

春木仁孝 (1983) 「フランス語の非人称構文：副詞的要素の機能と énonciation」『フランス語学研究』17(1), 18-35.

春木仁孝 (1991) 「ça pleut / il pleut —現代フランス語の“非人称主語”の ça をめぐって—」『ロマンス語研究』24, 27-34.

春木仁孝 (2011) 「フランス語の認知モードについて」大阪大学大学院言語文化研究科（編）『言語における時空をめぐって IX』大阪大学大学院言語文化研究科, 61-70

春木仁孝 (2012) 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化 研究』38, 大阪大学大学院言語文化研究科, 45-65.

春木仁孝 (2014a) 「ÇA を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48(1), 57-76.

春木仁孝 (2014b) 「ça mouille (ça+動詞) 構文のネットワーク」『時空と認知の言語学』3 (大阪大学大学院言語文

<sup>60</sup> Cf. Langacker 2008, 504.

化研究科), 41-50.

春木仁孝 (2016) 「再び *ça mouille* (*ça+* 動詞) 構文の特性について』『言語文化共同研究プロジェクト』2015, 31-40.

Langacker, R. W. (1993) “Reference-point constructions”, *Cognitive Linguistics*, vol. 4, no. 1, 1-38.

Maillard, M.(1994) “Concurrence et complémentarité de *il* et *ça* devant les prédicats impersonnels en français contemporain ou comment distinguer une phrase asubjectale d'une phrase à sujet indistinct ?”, *L'Information Grammaticale* 62, 48-52.

[https://www.persee.fr/doc/igram\\_0222-9838\\_1994\\_num\\_62\\_1\\_3101](https://www.persee.fr/doc/igram_0222-9838_1994_num_62_1_3101) (2025 年 3 月 30 日アクセス)

中村芳久 (2019) 『認知文法研究：主観性の言語学』くろしお出版.